

地球市民的資質の育成を目指す世界史学習の研究

－「フェアトレード」を軸にした授業実践を通して－

所属校：東京都立豊島高等学校

氏名：川 副 聡

派遣先：早稲田大学大学院

キーワード：フェアトレード・開発教育の視点・技能・態度の育成

I 研究の目的

現在の世界史学習においては、近現代史を重視した授業展開が必要とされているが、現実には、近現代史の内容構成の理論的枠組みが整備されていないという問題点がある。また、21世紀の社会科教育では、地球市民的資質の育成への貢献も求められている。地球市民的資質の育成は、開発教育、国際理解教育などにおいて提唱されてきた。特に開発教育は、学びと教えのバランスがとれ、課題解決策の一例を提示するという具体性をもったゴールのある授業展開であり、系統学習としての世界史教育が、開発教育から学ぶべきところは大きい。このことから、世界史の通常授業に開発教育の手法を取り入れ、授業展開することは、地球市民的資質の育成への貢献という世界史教育に課せられた課題に応えるための、一つの方法としての可能性を備えているといえる。

「近現代」単元の授業構成の際、経済発展問題が地球的課題の根源にあることは、押さえておくべきポイントである。中でも特に、「南北問題」に注目する必要がある。グローバル化の進展する現在、豊かな国々とそうでない国々との経済的格差の問題は、大航海時代・帝国主義の時代、第二次世界大戦後の南北問題という歴史的な流れの中で、認識されるべき重要な問題といえる。そして、世界の不均衡な現実や、構造的に不公正なしくみがあることに着目し、ナショナル・ヒストリーを越えて、世界的な諸地域の関係に注目して全体像をとらえる世界システム論などの方法を取り入れることは、一国史的、ヨーロッパ中心史観の克服につながるものである。

そこで本研究では、小単元「南北問題」においてフェアトレードを軸に開発教育の手法を取り入れ、世界史学習における地球市民的資質の育成への貢献を目指した授業実践を試み、それについて検討を行って、これからの世界史教育の方法と内容構成に役立てることを目的とする。21世紀を生きる高校生が、社会貢献できる態度を育成していくうえで、意義がある教材である。

II 研究の方法

1 授業実践前のアンケート調査

授業実践の前に、南北問題に関する生徒の世界認識等を調査し、授業実践後のアンケート調査と比較・検討することとした。

(1) 調査時期

2008年4月第1回目の授業時

(2) 調査対象

都内公立高等学校第2学年4学級(157名)

(3) 調査項目

「ワールド・スタディーズ」に挙げられている地球市民的資質にもとづいて調査項目を11項目作成した。

2 授業実践

(1) 対象

都内公立高等学校第2学年4学級(157名)

(2) 実施時期

2008年4月～5月、各学級8時間配当

(3) 小単元名

南北問題

(4) 小単元の目標

- ① 「南北問題」という世界の不均衡の存在を知り、「援助よりも貿易を」の視点から、望ましい方向への変化をもたらすために、フェアトレード等日常生活レベルでの社会参加が可能であることに気づき、買い物などの際にそれを心がける。【関心・意欲・態度】
- ② 南北問題をはじめとする現代の地球的課題を解決するために、世界をつながりあるシステムとしてとらえ、持続可能な関係構築の必要性について考えることができる。【思考・判断】
- ③ 地図・資料から情報を読み取り、それをまとめて発表することができる。図化して世界の国・地域の関係性を理解する世界史の基本技能を習得できる。【技能・表現】
- ④ 地球的課題を解決する際にも、歴史的経緯や世界の国・地域の地理を学び、その知識を土台として活用し、考えることの大切さがわかる。【知識・理解】

(5) 生徒の実態

事前アンケート調査からも、生徒は、世界の国・地域の名や、他者の厳しい現実に対して、「関心がない」というよりも学習の機会やリアルな現実に触れる機会が少なく、関心をもてないでいるといった方が実態に即しているといえる。また、学習形態としても、板書をノートに写すことが中心の授業を受けてきており、生徒がデータから必要な情報を読み取って自分の意見を文章に書いたり、発表したりという学習は、あまり行ってきていない。

以上のことから、生徒が世界に関心をもてるようにていねいに導入を行い、参加型の授業展開を行って、「フェアトレード」という日常生活レベルでできる課題解決策まで提示する、ゴールをもった学習を行うことが必要である。そして、授業では、記入式のワークシート型プリントを使用し、小単元の学習終了後、回収し、授業実践の効果測定を行うこととした。

3 授業実践後のアンケート調査

(1) 調査時期

2008年5月小単元の学習終了時

(2) 調査対象

都内公立高等学校第2学年4学級(157名)

(3) 調査項目

学習の効果を測定するため、授業実践前のアンケート調査と比較・検討できる内容とすることとした。それに加え、自由意見欄を設け、総合的に効果を検討できるように留意した。

III 研究の結果

1 授業実践前のアンケート調査

国際的支援活動に関心はあるものの、具体的に何をしたらよいかわからず、また、すぐに取り組める活動も身近にないと考える生徒が多く、フェアトレードも認知度が低かった。世界の国々についての知識も、テレビ番組などの影響から、イメージに偏りが見られた。

2 授業実践後のアンケート調査

生徒の世界の国々への関心が高まっていた。また、日常的購買行動における「選択・投票」を通じた社会参加への意識づけに貢献する指導として効果があった。そして、「援助よりも貿易を」の視点からフェアトレードを理解し、国際的支援活動に関心はあるものの、具体的に何をしたらよいかわからなかったけれども、身近なところから取り組める支援活動としてこれから買い物などの際にそれを心がける態度の育成に効果があった。

自由意見欄においても、今回の小単元「南北問題」の学習は概ね好評であった。図化作業なども楽しく行

うことができたという意見が多数を占め、生徒が上達の充実感を得ることができたといえる。また、「世界史」というと、暗記中心の勉強というイメージだったが、作業や意見の発表などもあり、参加して自分で勉強している感じで良かった」という意見も目立ち、系統学習の世界史の通常授業においても、アクティビティを効果的に取り入れることができたことが明らかとなった。そして、「歴史があって現在があり、世界はつながっているのだということが理解できたから、これからは世界史に興味をもって勉強したい」という意見も多く、小単元の目標を達成できたといえる。

IV 考察

1 今回の授業実践の効果

(1) 一国史を越えた世界史学習の「扉」としての効果があり、生徒の世界の国々への関心が高まり、後の学習の動機づけとして機能した。

(2) 世界がつながりをもっていることに気づき、南北問題を構造的に理解し、対等なパートナーシップとしての国際的支援活動に関心をもつことに効果があった。

(3) 日常の購買行動は、「選択・投票行動」としての面もあり、自分のお金の使い方が社会に影響を与えうることから、地球市民として心がけて行動することの大切さを理解することに効果があった。それにより、望ましい変化をもたらすための、社会参加への意識づけにつながった。

(4) 世界史の通常授業において、系統学習であっても、地球的課題の解決策の一例を提示するというゴールまで到達することができた。その際、考え方のプロセスも生徒に提示し、課題解決策まで考える態度を育成するに至った。

(5) 資料からの情報の読み取りや発表、図化技能の習得に効果があった。

(6) 歴史があって現在があることを理解し、歴史的経緯や世界の国・地域の地理を学び、その知識を土台として活用し、考えることの大切さを理解することに効果があった。

2 今後の課題

今回の授業実践においては、世界史の通常授業において、地球市民的資質の育成への貢献を目指した。地球市民的資質の育成には、地歴・公民科としての連携や、他教科との連携、総合学習等における取り組み、あるいは学校行事の中でなど、学校全体としての取り組みまで視野に入れることによって、より効果的な展開ができるものと思われる。その点についての検討は今後の課題である。

地球市民的資質の育成を目指す世界史学習の研究

－「フェアトレード」を軸にした授業実践を通して－

所属校：東京都立豊島高等学校

氏名：川 副 聡

派遣先：早稲田大学大学院

キーワード：フェアトレード・開発教育の視点・技能・態度の育成

